

第12分科会

研究主題

共に学び、生きる力をはぐぐむ体育授業の創造
－失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ－

福岡県立修猷館高等学校
しゅうゆうかん

日程

9:00	9:30	10:40	11:00	11:50	12:40	13:30	13:45	14:30	15:00	15:10
受付	開会 行事	休 息	公開 授業 ①	昼 食	公開 授業 ②	休 息	研究 発表 協議	指導 助言	閉 会 行事	

公開授業案内

公開授業①	第2学年女子	「ダンス」	講堂
公開授業②	第1学年	「体育理論」	講堂

学校所在地図



交通機関

- 最寄駅
「西新(福岡市営地下鉄)」下車 徒歩3分
- 経路
博多 発 8:31 8:34 8:37 8:43 8:46
↓福岡市営地下鉄空港線
西新 着 8:44 8:47 8:50 8:56 8:59

学 校 概 要

学 校 名	福岡県立修猷館高等学校		
校 長 名	亀 岡 靖 (館長)		
学 級 数	31 学級	生 徒 数	1,237名
所 在 地	〒814-8510 福岡市早良区西新6丁目1番10号		
連 絡 先	TEL 092-821-0733 FAX 092-822-6564		

【学校紹介】

天明4年（1784年）黒田藩藩校「東学問稽古所修猷館」として設立！ ～伝統とは守るものではなく、創っていくもの～

226年の歴史と伝統を有し、激動の時代をとおり「修猷館」の校名と「世のため人のために尽くす」修猷館教育を一貫して継承してきた。修猷館の果たした役割は、それぞれの時代に生きた諸先輩方の生き方に見てとることができる。その精神は星霜を重ねてもなお変わることなく、校訓・校則を持たず文武両道を貫き「質朴剛健」「不羈独立」「自由闊達」の不易の気風を現在まで受け継いでいる。



『六光星』

北極星を象ったものであり永久に揺るがぬ人生指針をこの星に仰ぐ。

『修猷』

四書五経の向書「微子之命」中の句「厥（そ）の猷（みち）を踐（ふ）み脩（おさ）め」による。

○沿 革

- 天明4年（1784） 朱子学を教える黒田藩藩校「東学問稽古所修猷館」として開校
儀式の際に掲げた「孔子聖像」は現在も入学式で掲げている
- 明治4年（1871） 藩校修猷館は廃藩置県により廃校
- 明治18年（1885） 福岡県立英語専修修猷館として復活
- 昭和24年（1949） 福岡県立修猷館高等学校と改称（女子生徒入学）

○主な先人

- 金子堅太郎（藩校）「大日本帝国憲法起草」、広田弘毅（M31）「内閣総理大臣」
- 緒方竹虎（M39）「副総裁」、安川第五郎（M39）「東京オリンピック組織委員長」
- 田中耕太郎（M41）「最高裁判所長官」等

○教育目標・方針

- * 修猷館の教育に受け継がれてきた時代を超える普遍的理念を重んじながら、将来の日本を担い、また世界へと羽ばたく、人間性豊かな人材を育成する。
- * 「師弟同行」を实践し、教師と生徒、すべての間の深い相互信頼に根ざした、自由闊達な教育活動を展開する。

研究主題

「共に学び、生きる力をはぐくむ体育授業の創造」

－失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ－

福岡県立修猷館高等学校

1 主題設定の理由

(1) 大会主題とのかかわりから

大会主題の「運動の楽しさを味わわせ、（生涯にわたって運動に親しむ）体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」は、運動が「わかる・できる・かかわる・活用する」喜びや楽しさの体験のなかで、運動に親しむ体育的学力を確かなものにするものである。このことは運動・スポーツの日常化が進み、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質・能力の育成につながる体育授業の創造を目指すものであると考える。

この大会主題の趣旨に関しては、本校の教育方針や保健体育科としてここ数年実践してきた内容と一致している部分が多い。例えば、それは「10年後・20年後に向けた社会で通じる力の育成」や、「マイスポーツを獲得し豊かなスポーツライフにつながる能力の育成」に重点を置いた指導等である。

本校の研究主題は、大会主題の趣旨を踏まえ、「共に学び、生きる力をはぐくむ体育授業の創造」と設定した。これは、本校の教育に受け継がれてきた時代を超える普遍的倫理である「世のため人のための教育」「自由闊達」「不羈独立」「質朴剛健」等を重んじ、その特性を十分に生かした教育活動のなかで、中学校までに育成された体育的学力を更に大きくし、チームワークを尊び、言語活動の充実や道德教育の推進、更には、得た知識・技能を「活用する・応用する喜び」に重点をおいたものである。本校の主題設定の理由は、以下の2点である。

ア．技能やリーダーシップ育成に重点を置いたこれまでの取り組みから、体づくり運動や運動領域を超えた内容の体育理論と、各種目の運動領域の知識や技能とを融合した取り組みを行う。さらに獲得した能力を活用する生徒主体の授業運営の挑みを生徒と教師の信頼関係の元に行う。そのことを通じ、運動に親しむ体育的学力を更に確かなものとするとともに喜びや楽しみを味わい、自己指導力・評価力、課題解決力を向上させ、生きる力をはぐくむ。

イ．本校の校風である自由闊達・不羈独立から生まれる自治的活動を生かした生徒主体の授業運営や、大会等の企画運営の実施まで発展させる。その活動を通じて、リーダーシップ・フォロワーシップ機能を獲得し、豊かなスポーツライフのリードオフマンを育てる。

(2) 大会主題の副主題とのかかわりから

大会主題の副主題「幼児児童生徒の発達の段階を踏まえて」は、新学習指導要領の改訂に準じた高校入学までの体育的取り組みのつながりを理解するとともに、実際の生徒の状況を考慮し、発達の段階に応じた体育授業を展開することであると考えられる。

そのことを踏まえ、本校生徒の実態をみると、運動を楽しんだり、運営する能力に関しては育っているが、新体力テストの結果や学校行事に見られる運動能力等の実態を考えると、体力の低下は大きな課題として浮かびあがってくる。この課題の解決やその他の体育的学力の更なる向上のために、前述の本校の特性を活用した従来の取り組みに追加・改善を行う目的で、本校の副主題を「失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ」と設定した。

自ら学び・考え、自己の行動に責任を持つ誠実な人間づくりの本校の教育方針を重んじながら、具体的な授業場面では、発達の段階や生徒の状況を踏まえ目標（課題である体力向上の意識を加え）を明確にし、生徒主体の取り組みのチャレンジ活動を大切にする。更には、そのチャレンジ活動の中で生じるであろう生徒間の摩擦・衝突等も積極的失敗であるにとらえ、勇気をもってそのことに対処させ、その結果、知的能力だけでなく、体力的・精神的にも鍛えられた人の痛みのわかる感受性豊かな人格が育つと考えられる。この学びのサイクルの積み上げが更なる努力・向上につながり、段階的なステップアップにつながるものとする。

2 主題の意味

(1) 「共に学び」とは

生徒が主体的に学ぶ学習において、「師弟同行」を実践し、教師と生徒・生徒同士の深い信頼関係に根ざした授業展開のことである。自己への気づき、他者とのコミュニケーションにより自浄作用がはたらき、自治活動が促されるものとする。

体育実践の双方向の学びを目指し、何のために学び、いかに生きるべきかを互いに探求する。共に考え、共に悩み、共に学び、共に発展する学びの場の形成は、教師から生徒への一方通行の教えではない。またこれは、生徒間・教師間の相互かつ補填的学びの場でもある。

ア. 信頼関係（場づくり、雰囲気づくり）

- ①一人ひとりの考えを大切にする。異なった考えを認め合う。
- ②安心でき互いに心を開き・助け合う。
- ③他者の評価を気にしすぎることなく、自由に何でも言える。
- ④役割を明確にし、責任を持つ。相手の可能性を信じる。

イ. リーダーシップ能力・フォロワーシップ能力の育成。

(2) 「生きる力をはぐくむ」とは

心と体を一体としてとらえ、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を目指し「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を重視し、体力・自己指導力・課題解決力が身につく体育的学力が高まることである。

他者・社会・自然・環境との関わりの中で、心と体を一体としてとらえ、健康・安全学習の充実や運動の合理的・計画的な実践を行い、以下の力量の獲得を目指す。

ア. 自らの健康を適切に管理し、改善していく力。

イ. 体力・実践力・チームワーク・リーダーシップ能力。

ウ. 生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力とリードオフマン能力。

◎「生きる力をはぐくむ」各ステージの目指す生徒像

	習得ステージ (第1学年)	活用ステージ (第2学年)	応用ステージ (第3学年)
ア	①各種運動に主体的に取り組む ②ルールを厳守する ③集団の一員としての役割を意識して行動する ④種目・施設に応じて安全面への配慮を行う	①課題に応じた運動の取り組み方を工夫する ②フェアプレイの大切さや、仲間を尊重する ③種目に応じて怪我防止のための準備運動などを工夫する	①「健やかな体」を維持するための運動の取り組み方を工夫する ②コミュニケーション能力を身につけることにより楽しく運動に関わる ③準備運動や運動後の体のケアを行い、安全面の配慮を行う

イ	① 積極的なチャレンジで課題を見付ける ② 各運動の基本的な技能を習得する ③ 各運動を行うことで体力の向上を図る ④ 運動を楽しむための学び方を理解している ⑤ 運動の基礎となる「体づくり」について理解している	① 基本的な技能を組み合わせ課題解決を行い、有効的な練習方法の選択を行う ② 作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するために調整の仕方を身に付ける ③ 仲間と連携して組織的な活動を行う	① 今まで取り組んできた個やグループの目標と成果を検証し課題解決を行う ② 生涯にわたって楽しむための個やグループでのかかわり方を見付ける ③ 運動技能を更に高めマイスポーツにつなげる ④ 練習やゲームで意図した攻防の展開ができる
ウ	① 運動が「わかる」「できる」「かかわる」楽しさを理解している	① 身につけた能力で、運動の合理的な実践やゲームや発表会・交流会等の運営を積極的に行う ② 運動をより楽しむためには何が必要かを考え、目標設定・目標達成に向けた課題解決への取り組みを行う	① 選択した種目が今後マイスポーツにつながっている ② 授業を行っていく中で論理的思考力を身につけることができる ③ 機能としてのリーダーシップ・フォロワーシップを発揮する ④ ゲームや発表会、交流会等の運営を積極的に取り組む（リードオフマン的関わり方）

(3) 「失敗と成功」とは

高い目標にチャレンジすることで、積極的失敗を成功へつなげる取り組みである。課題解決への失敗体験と、その後の悩み・苦しみ・工夫・努力の過程、そして、最終的な結果としての成功体験が、喜びと自信を持たせることになる。そのことが更なるチャレンジへとつながる。

- ア. 「失敗」とは、高い志（目標）を抱くことの大切さ、難しいことや苦しいことに本気でチャレンジする勇気、失敗を恐れることなく行動できること、失敗の体験が保障される場を意味する。計画性のない失敗や放任の危険な失敗を意味するものではない。
- イ. 「成功」とは、自分自身や仲間と共に達成した成功体験の意味で、それによって得た自信から次の高い志につながるものである。成功に至るまでのプロセスを重んじ、この部分の工夫・協力・努力が大切となってくる。指導者側の過保護なサポートや型にはめた指導でなく、課題解決に向け、考えさせる糧となるサポートや、かかわり方が大切となってくる。
- ウ. 運動の学びのサイクル（PDCAサイクル）[P：plan, D：do, C：check, A：action]を活用し、合理的・計画的な運動実践を主体的に行う。「失敗と成功」の体験のなかで「運動の楽しみ」「健やかな体」「自己指導力・評価力」「体力・技能」の向上を図る。最終的には、運動に親しむための体育的学力「技能、態度、知識、思考・判断」を高め、個に応じた豊かなスポーツライフを継続できる資質や能力、そしてリードオフマンとしての力を獲得する。この際、教師は、生徒の発するサインを敏感に感じ取りサポートする。

(4) 「サイクルを積み上げる楽しさのステップアップ」とは

目標の段階的なレベルアップに関することで、成功体験の自信からの内発的動機づけ、目標の変化（楽しさの追求、個から集団への意識）で、自信と努力継続で確信が生まれる。
 「（1年）習得ステージ → （2年）活用ステージ → （3年）応用ステージ」

ア. 第1学年目標【体力の向上と主体的な学びの習得ステージ】

本校が何を目標としているかを理解し、中学校までに体験した運動への取り組みにプラスして、運動に対する学びを学習する。

- ①体を動かす楽しさと、運動が「わかる」・「できる」・「かかわる」楽しさの体験を積む。
 - ②運動の基礎となる体づくりを行う。体ほぐし運動・動ける体づくり・体力を高める運動を通して、体と心の一体化・人間関係ほぐし・体が自由で力強い動きを習得する。
 - ③目標達成への取り組みで、個の状況に応じた「学び方」を主体的に選択し工夫する。
*今までに習得した学び方や知識理解「体育理論」から生まれる新たな創造「探究発見」の学び方等
 - ④集団としてのルールの厳守や個々の役割理解、そして安全管理の徹底を行う。
- イ. 第2学年目標【習得した体育的学力（技能、態度、知識、思考・判断）の活用ステージ】
身につけた能力で、運動の合理的実践や授業の進め方の改善を行う。（PDCAサイクル）
- ①これまでの体験や運動に対する知識から、自分に適した運動種目や学び方を選択する。
 - ②運動をより楽しむためには何が必要かを考え、楽しさのレベルの変化（一過性の楽しさからの脱皮）や運動・スポーツの社会化の必要性を理解して目標設定し、目標達成に向けた課題解決への取り組みなど、効果的な授業内容を実施する。
 - ③個人やリーダーを主体とした自主的な授業運営を行う。
- ウ. 第3学年目標【新たなチャレンジやリーダーシップ機能の応用ステージ】
運動技能を向上させ、身体能力を高め得意な運動（マイスポーツ）を獲得する。生涯を通じた豊かなスポーツライフへとつなげる。
- ①技能の更なる向上を目指す。
 - ②リーダーを中心とした主体的な授業の取り組み方
*三年間の学びが、行事等に生かされていく。

3 研究の目標

共に学び、生きる力をはぐくむ体育授業で、獲得した体育的学力を活用する能力やたくましい体、そして豊かなスポーツライフのリードオフマンを育てていくための「失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ過程」の在り方を究明していく。

4 研究の仮説

「失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ過程」の在り方を、以下の着眼点Ⅰ・Ⅱ・Ⅲから具現化すれば、生徒は獲得した体育的学力を活用する能力やたくましい体、そして豊かなスポーツライフのリードオフマンを育てることに迫ることができるであろう。

着眼点Ⅰ PDCAサイクルの活用

着眼点Ⅱ 指導の重点化

着眼点Ⅲ 自己評価の活用

5 研究の構想

(1) 着眼点Ⅰ 学習活動の進め方の工夫（PDCAサイクルの活用）

各ステージにおいて、お互い（生徒間、生徒と教師間）のコミュニケーションを図り、毎時間PDCAサイクル活用した生徒の主体的な取組で、学び方を選択するなど試行錯誤しながら課題解決を行い成長していく。

P (plan) 「目標・計画」	体育理論で運動やスポーツの合理的、計画的な実践や生涯にわたる豊かなスポーツライフを送る上で必要となるスポーツに関する科学的知識等を学び、本校体育目標や学年目標を理解し、自分に応じた目標を定め、学習のおおまかな見通しを立てる。 *目標 ①体力を高める ②技がよりよく出来る ③記録を向上する ④勝敗を競う ⑤スポーツの特性を理解する ⑥仲間との関係を高める *学び選択 目標達成に向けて（課題解決のために）資料・情報を集め、自分の状況に適應できるようアレンジする。
---------------------	--

D (do) 「実行」	課題解決に向けた合理的・計画的な実践・努力をする。 ＊良い授業の例として 雰囲気が良い、勢いがある、力を出し切る活動で、自然と「歓声があがり」「賞賛の声が湧き起こり」「励ましの声が送られ」「互いに教え合う」授業。 (音楽の活用、イベント化、記録の分析、戦術会議、視聴覚教材の活用など) ・本時の観点別目標を明確にする(しぼりこむ、シンプル化) ・場(雰囲気、教材、用具)やルールを自分たちに適したものにする。 ・学習資料・チームノート等を有効に活用する。
C (check) 「評価」	自分の活動をより高めるための評価 ＊自己評価を適宜行う。自分やチームの学習活動を客観的に分析し、自分たちの目標に対する課題を見出し、課題解決のために情報収集・工夫・努力を行うための評価である。また、単元全体を振り返り、次の活動に生かすための評価でもある。 (指導者や生徒間「リーダー、経験者等」からのアドバイスも参考にする) ＊活動の時期別評価 ・診断的評価：初期に種目に対する技能分析(種目知識・ルール理解を含む)や目標の設定。 ・形成的評価：活動中の反省と次の学習方法の検討をする。目標の再設定。 ・総括的評価：全活動を振り返り自己評価、また得たものを次の単元の学習計画等に生かす。 ・自己評価を活動中に適宜行う。
A (action) 「改善」 「新たな挑み」	課題解決：課題分析や学び方の工夫、仲間との協力、そして努力。失敗から学ぶ成功体験。 楽しさのステップアップ：課題解決の自信から新たな目標を設定し挑む。

(2) 着眼点Ⅱ 指導の重点化

楽しさのステージ	創作ダンス	体育理論
習得ステージ(第1学年) ①「わかる」「できる」「かかわる」 ②心と体の一体化 ③学び方の工夫 ④ルールの厳守・安全管理	①表したいテーマにふさわしいイメージをとらえる ・緩急強弱のある動きや空間の使い方に変化をつけて表現する ・簡単な作品にまとめたりして踊る ②仲間と自由に関わりながら心と体をほぐしコミュニケーションを育成する ③自己評価表を活用する ④役割を積極的に引き受け責任を果たす	①スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴を学び、スポーツに「かかわる」楽しさを習得する。 ③合併クラスによる一斉授業やテーマ別に分かれた課題学習の取り組み。
活用ステージ(第2学年) ①運動の学び方 ②目標達成に向けた課題解決への取り組み ③主体的な授業の取り組み方	①個や群で、イメージを強調する緩急強弱を最大限に強調した対極の動きと空間の使い方に変化をつけて即興的に表現する ②自己評価を行うことにより課題解決を行う ③グループ活動を行い意見交換をする	②習得した知識や理解を自分たちの新たな発想で発展させる。 (課題学習やグループディスカッション) ③習得した知識や理解から生まれる新たな創造で、運動やスポーツの効果的な学習の仕方を主体的に学ぶ。
応用ステージ(第3学年) ①技能向上 ②発表会・交流会等の企画運営	①各種ダンスへのチャレンジ ②音響や衣装などの演出	②主体的に学んで生まれた知識と活用を活かし、各ライフステージにおける運動やスポーツの楽しみ方を模索する。

(3) 着眼点Ⅲ 「自己評価の活用」

◎自己評価の活用は、観点別評価をふまえて以下の取り組みを行う。

ア. 相互評価

イ. 各学年の目標に応じた自己（チーム）評価表の活用

ウ. 他者評価（リーダー、チームメイト、仲間）

エ. 指導者のアドバイス、支援

6 研究の実際

【実践例Ⅰ】

単元名 ダンス「創作ダンス」

○単元目標

- (1) 表したいテーマにふさわしいイメージをとらえ、個や群で、対極の動きや空間の使い方に変化を付けて即興的に表現したり、イメージを強調した作品にまとめたりして踊ること。
- (2) ダンスに主体的に取り組むとともに、互いに共感し高め合おうとすること、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、合意形成に貢献しようとするなどや、健康・安全を確保することができるようにする。
- (3) ダンスの名称や用語、文化的背景と表現の仕方、体力の高め方、課題解決の方法、交流や発表の仕方などを理解し、グループや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。

○指導にあたって

- (1) ステップアップする学年目標とそれに伴う授業形態の変化

☆第1学年 【習得ステージ】

- ・表したいテーマにふさわしいイメージをとらえる
- ・変化をつけたひと流れの動きで即興的に表現する
- ・緩急強弱のある動きや空間の使い方に変化をつけて表現する

☆第2学年 【活用ステージ】

- ・多様なテーマの中から表したいテーマを選び、中心となるイメージをとらえる
- ・中心となるイメージを即興的に表現する
- ・個や群で、イメージを強調する緩急強弱を最大限に強調した対極の動きと空間の使い方に変化をつけて即興的に表現する

☆第3学年 【応用ステージ】

- ・生涯スポーツにつながる取り組み
- ・各種ダンスへのチャレンジ
- ・音響や衣装などの演出

創作活動は、個性との関係が深く、違いがあるから面白く、多様な内容を含んで成立しているため、個々の「差」を「違い」としてとらえることができるし、多様な個性を認める自由な雰囲気と人間関係を大切にすることができる。

そこで、「教師対生徒」の一方通行ではなく、生徒同士が向かい合う「コミュニケーション形態」をとり、グループ活動を行い、場を共有する仲間を感じ合い、共にかかわりあって活動することでコミュニケーション能力の育成を行う。また、お互いの個性を認め合い踊る楽しさを味わい、夢中になってからだを動かすことで体力向上に繋げることができる。

(2) 手だて

着眼点Ⅱ・Ⅲの「指導の重点化」「自己評価を活用する」取り組みア・イ・ウ
ア、リーダーに続け <心と体ほぐし>

仲間と自由に関わりあいながら心も身体もリラックスして、声を出して笑ったり、自然に歓声があがったりすることで、仲間と一体感が持てるような、ウォームアップを行う。

- ①ペアでストレッチをして伸びる感覚をつかみ取ったり、緊張を解いて脱力したり、相手の柔軟度に応じた力の加減をしながら、楽しいコミュニケーションを生み、仲間との一体感を育てる運動を行う。(スキンシップをとりながら体の調整)
- ②筋力が高まる運動を行う。
- ③いろいろな条件で、リズムカルに歩く・走る・回す・ねじる・曲げる・伸びる・転がる等の運動を行う。
- ④リズムに乗って心が弾み体を極限まで使い「日常の自分」から「表現の世界へ」スイッチを切りかえる。

・ペアで柔軟性を高めている様子



・二人組で力のonとoffを感じあいながらスキップで移動したり、相手を回転させていたりしている様子



イ、動きのイメージをふくらませ動く

音楽・色・音・形から動きのイメージをふくらませ、それらを言葉に代え即興表現を行う。

- ①テーマを元に、色や音や形から連想できるものをサブテーマとし、イメージを出し合う。(直感的にとらえたイメージを表現する)
- ②イメージしたものについて、さらにくわしく動きや特徴をとらえる。(強調する部分を明確にする)
- ③お互いのポーズをいかすためにお互いの関わりを意識しながら動く→ポーズ



ポーズは(ねじる・倒す・伸びる・肘の向きを変える・床に面している体の部分を変える)

・曲のイメージを感じとり、二人組で新聞紙の音や形の変化に反応しながらポーズを取っている様子
(相手のポーズをよりいかすようにバランスよくする)



ウ、動きの引き出し方

擬態語や擬声語や口伴奏を使う。 教師の言葉かけを行う。

- ①擬態語や擬声語や口伴奏を使い、そのものになった気分にさせる。
- ②教師の言葉かけ・・・「それからどうなったの?・・・それから?・・・それから?・・・」と言葉を繋げイメージを出し合い、動きでスケッチをする。



- ・「極限まで体を使って」「臍の向きを変えて」「高さをかえるよ」「全身で反応」「関節から曲げてみようか」「床に面している体の部分を変えて」「ねじり」「ジャンプ」「ターン」「回転」「速度を変えたり」「線を変えたり」「強調させたいところは特にハッキリ」

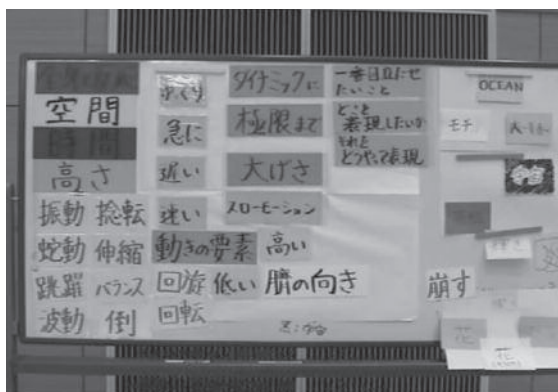


エ、中間発表で5つの観点から課題を見つけ改善する着眼点Ⅰ（PDCAサイクルの活用）

お互いが見せ合うことにより、よい動きのポイントを見分けることができ課題解決を行う。

- ・「空間」「時間」の崩し方や、「高さ」の変化について説明をしている様子





*5つの観点

- ①伝えたいことが強調できている
- ②緩急強弱のある動きである
- ③体を極限まで使っている
- ④表現力豊かである
- ⑤動きの要素が使われている

・グループごとに発表している様子



○成果と課題

個々の「差」を「違い」としてとらえ、多様な個性を認める自由な雰囲気を作り、共にかかわりあって活動することで、失敗の声が歓声に変わるほど仲間とコミュニケーションをとることができた。

また、全身を使って極限まで動くことから、柔軟性・調整力・平衡性・筋持久力を高めることができた。

着眼点Ⅰ：PDCAサイクルの活用により、失敗と成功を体験し、ステップアップすることで更なる目標設定ができ技能向上へと繋がった。

着眼点Ⅱ：指導の重点化により、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」「知識・理解」が高まった。

着眼点Ⅲ：自己評価の活用により、課題解決能力が身についた。

今後は、生徒の豊かなイメージを引き出すために、心と体に響く言葉かけや、ダンスの世界に自然にとけ込むことができる教材の工夫を行い、生徒の興味を喚起し、楽しんでできる授業の研究を行っていきたい。

【実践例Ⅱ】

単元名 体育理論

○単元目標

- (1) スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について理解できるようにする。
- (2) 運動やスポーツの効果的な学習の仕方について理解できるようにする。
- (3) 豊かなスポーツライフの設計の仕方について理解できるようにする。

○指導にあたって

- (1) ステップアップする学年目標とそれに伴う授業形態の変化

本校の体育理論は、研究の概要に記載されている「失敗と成功のサイクルを積み上げる楽しさのステップアップ」という考えを基に実施されている。

☆第1学年 【習得ステージ】

スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴を学び、スポーツに「かかわる」楽しさを習得する。＊かかわるとは「する」「みる」「ささえる」「調べる」ということ。

授業形態は、主に一斉授業（スライド、学習シートを活用）とテーマを与えた課題学習で行う。

☆第2学年 【活用ステージ】

習得した知識や理解から生まれる新たな創造で、運動やスポーツの効果的な学習の仕方を主体的に学ぶ。

授業形態は、1年時で習得した知識や理解を自分たちの新たな発想で発展させる。（課題学習やグループディスカッション）

☆第3学年 【応用ステージ】

主体的に学んで生まれた知識と活用力を活かし、各ライフステージにおける運動やスポーツの楽しみ方を模索する。

授業形態は、各テーマ毎に分かれ課題研究発表の形で行う。

- (2) 手だて

各学年のねらいを基に、学習シート（目標設定〔テーマ〕・活動記録・自己評価等）を活用した主体的な取り組みや、場の設定を工夫することで、失敗（学習内容は理解できたが活用力や実践力には結びつかないこと）と成功（自分の生活に活用する力が身に付き、自ら探求する学びの姿勢）を繰り返し、楽しさ（今まで知らなかったことがわかるようになる。知的好奇心をくすぐる。）をステップアップさせる。

【具体的な手だて】

①学習シートを活用したPDCAサイクルの設定

- ・生徒は全体的に真面目で素直な者が多く、学習に対する意欲が高い。個人あるいは集団で考える時間を与えると、積極的な反応を示すので、生徒間、生徒と教師間のコミュニケーションを図る。

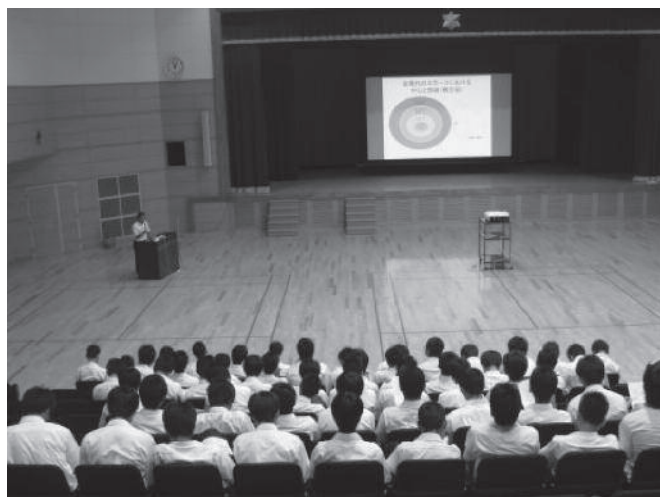
②課題学習における発表前の事前指導（打ち合わせ）

- ・学習のねらいの明確さ、情報収集の確認、表現の仕方、資料の確認、課題学習の取り組み方などの打ち合わせを最低3回行う。

③自己評価

- ・主体的活動、合議、コミュニケーション、活用力、学び方の獲得、知識の習得などを自己評価させる。

○4クラス160名による一斉授業の様子



- ・ 120～160名の生徒を5名の教師で担当する。上記の写真は「スポーツの歴史的発展と変容」の単元を1名の担当教諭が一斉に授業を行っている様子。課題学習にステップアップしていくまでの知識を共通認識の基で学び、今後のグルーピングした課題学習の発展と知識の獲得をねらいとしている。

○講義中、学習シートに記入している様子



- ・ 学習シートを活用したPDCAサイクル

〔Plan：目標，計画・Do：実行・Check：評価・Action：更新，改善〕

上記の写真は「民族スポーツが現代のどのようなスポーツ種目に結びついていったか」を模索している様子。

○成果と課題

授業の中で、積極的に活動できる雰囲気や場を設定することにより、自ら探求する学びの姿勢と生きる力をはぐくむことができた。

失敗と成功の体験を通して新たな高い目標へとチャレンジし、今まで知らなかったことがわかるようになる知的好奇心をくすぐる楽しさを味わうことができた。

学習内容は理解できるが、活用力や実践力に結びつけるためには時間数が足りないので、座学以外の時間や生徒の実態に応じた指導の在り方を工夫する。

7 研究の成果と課題

○成果

着眼点Ⅰ：「PDCAサイクルの活用」では、運動の基礎となる体づくりを行うことで動ける体をつくり、体力を高める運動を身につけることができた。運動の合理的実践や失敗と成功のくり返しにより新たな課題を発見し、スポーツに「かかわる」楽しさ（する・みる・ささえる・調べる）を学習することができた。スポーツが社会的・文化的にどのような発展や変化をし、どのような役割を果たしているかなどを学ぶことにより、興味関心が高まり、学ぶ楽しさが喜びと自信につながった。

着眼点Ⅱ：「指導の重点化」では、『習得ステージ→活用ステージ→応用ステージ』の学習の指導内容を明確にすることで、体育的学力の面においても発達段階に応じた目標設定を明確にし、知的能力だけでなく、体力的・精神的にも学びのサイクルの積み上げが段階的ステップアップにつながった。

着眼点Ⅲ：「自己評価の活用」では、運動に親しむ体育的学力を更に確かなものとするとともに喜びや楽しみを味わい、自己指導力・評価力・課題解決力を向上させ、チャレンジ精神を生み出し体育的学力を向上させることができた。また、更なるチャレンジ精神を生み出すことになり、体育的学力を身につけさせることができた。

グループ活動を行うことで、チームの一員としての役割や責任を理解し、共に解決する楽しさを味わい協調性や表現力を身につけることができ、よりよく問題を解決する資質や能力、コミュニケーション能力を高め、お互いが意見を交換することで自浄作用が働き、スポーツに対する他人の意見や考えに「気付く・疑問を持つ・推論する・選択する・話す・聞く・組み立てる・定義する・例を挙げる」など豊かなスポーツライフを継続する「生きる力」に繋げることができた。

○課題

今後の課題は、自分のライフスタイルにあった豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるために、生徒を意欲的にさせ、思考活動を刺激し、思考を深めさせたい。そのために、教師は的確な助言の実施を心掛けたい。具体的には、一問一答型から幅のある一問多答型や、答えの広がりが見られるような一問連答型への転換を目指し、生徒の「創造性」や「創造的思考」の能力開発に努めたい。そして、適切な時と場、的確な言葉を識別・選別し、生徒の意識や思考を鋭くキャッチする「心の目」を持ち、考えようとする意欲を高め、追究的な思考を生むような発問を研究したい。

また、生徒の主体的行動を支援する工夫として、指導者が、「生徒の学びの姿勢や過程を多面的に見取る支援」、「ねらいにせまるための授業展開の支援」、「日常化につなげる企画・運営の支援」の工夫を行う。